feel

羽澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｆｅｅｌ

【Ｎコード】
Ｎ３６８１Ｙ

【作者名】
羽澄

【あらすじ】

ーー突然、世界が変わった。

普通のＯＬゆかりが体験する、非日常の毎日。

慣れたはずの環境も、人も、変わらないのに…私だけが変わってしまった。

1

雑踏の中、私は立ち尽くしていた。

「……いたっ！ちょ、邪魔なんだけど」

肩に何かドンとぶつかり、よろけてしまう。

立ち直して、ぶつかった方向を見上げると怒った顔の女の子がいて、慌てて頭を下げる。

「道の往来でボケッと立ってんなつっーの、おばさん」

謝る姿勢を見せたら彼女は一言二言イヤミを吐き捨て、また人混みの中へと消えていった。

ーーー確かに人混みの中でボンヤリ立っていたら邪魔よね。

溜め息をはいて、すぐ近くにあったカフェに入り、窓際の席に座る。

すかさず店員が「いらっしゃいませ」と、お冷やを持ってきた。

お辞儀をした後、伺う様な視線があったので、一瞬考えてメニュー表を開き〔ホットコーヒー〕を指差す。

「……ホットコーヒーをおひとつでよろしかったでしょうか？」

何も言わずメニュー表を指差したので少し戸惑った様子だったが、すぐに笑顔を浮かべて注文を繰り返し聞いてくる。

その様子にホッとして、話終わるのを待ち、私が頷くと店員が「少々お待ち下さいませ、失礼します」とテーブルから離れていった。

カバンから携帯を取りだし、アドレス帳を開く。

ーーー…電話よりメールだよね、きっと。

一瞬指が止まったが、気を取り直し《成瀬課長》の名前を探しだすと、ボタンを押しメール作成の画面をよび出す。

「……」

カチカチっと、さっき頭で考えた短い文章を打ち込む。
3行、僅か100文字にも満たないメールを打つと、一度読み直し〔送信〕のボタンを押した。

送信完了の文字を確認してから、マナーモードに設定し、パクンと携帯を閉じる。

ーーー…さて、何て返ってくるかな。

携帯をテーブルに置いて、店員が持ってきた水を飲んだ。

思ったより喉は渇いていたらしく、すぐにコップは空になる。

ーーーガリガリガリ

口に含んだ小さい氷を噛み頬杖をついて、座ったテーブルから見える窓越し人混みを眺めた。

ーーー…ほんと、人生って何が起こるか分かんない。

ボンヤリ考えにふけっていると、テーブル誰か近づいた気配を感じて、そちらに視線を向ける。

「お待たせしました、ホットコーヒーになります」

居たのは店員で、先ほど注文したコーヒーを置くと軽く会釈し、また離れていった。

コーヒーからは湯気が立ち、香ばしいにおいが鼻をくすぐる。

今すぐ飲みたいが猫舌なので、冷めるまで待たないといけない。

ーーーブーブーブー

待て、をする犬の様にコーヒーの前で大人しくしていると、テーブルの携帯が震えた。

ーーー…あれ、思ったより早かった。

表示された名前を見て驚いてしまった、まだメールを送ってから5分も経っていないのに。

彼は携帯のメールの返信は皆無と言っていいほど返さない。

無駄が嫌いな人間で、返事がくるなんて奇跡に近かったりする。

ーーー…でも、今日は緊急事態だから返信くれたんだろうなぁ。

少しドキドキしながら携帯を開き、メール画面をのぞく。

ーーーーーー

ｆｒｏｍ　成瀬課長

ｔｉｔｌｅ　Ｒｅ：佐倉です

本文

分かった、迎えに行く。

今どこにいるんだ？

ーーーーーー

ーーー…おぉ、いっぱい書いてあるっ！

事務的な内容だが、思わず頬がゆるみ、何度も何度も読み返してしまう。

一か八かで、上司に今から迎えに来て下さいとメールはしたが、本当に来てくれるとは。

ーーー…良かった。この状態で一回会社に帰ってこいとか言われたら、困って絶対泣いてたよぉ。

実際さっきまで張っていた緊張の糸が少しゆるんたのか、少しウルウルしてしまっていた。

迎えに来てくれるのならば、今いる店名と詳しい場所を返信しなくてはいけない。

カチカチと返信画面を開き、課長に返信のメールを打つ。

送信完了の画面を見て、携帯を閉じる。

ーーー…私、このまま……なのかな。

両耳を手で押さえて目をつむり、少しして手をはずしてから目を開く。

「……」

小さく溜め息をはいて、冷めたコーヒーを飲む。

砂糖もミルクも入れなかったので、コーヒーは苦くて少し口をつけただけで飲むのをやめる。

カチャンと乱暴にカップをソーサーに置くと、コーヒーは波紋を広げながら揺れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3681y/

feel

2011年11月9日08時15分発行